

Prognostic value of nuclear morphometry in myxoid liposarcoma

川口, 健悟

<https://hdl.handle.net/2324/7182340>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : © 2023 The Authors



(別紙様式2)

氏 名	川口 健悟			
論 文 名	Prognostic value of nuclear morphometry in myxoid liposarcoma			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	相島 慎一
	副 査	九州大学	教授	馬場 英司
	副 査	九州大学	教授	大賀 正一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

粘液型脂肪肉腫（myxoid liposarcoma、以下MLS）は、脂肪肉腫の20%～30%を占め、特異的な予後不良因子として円形細胞成分（round cell component、以下RCC）を有する腫瘍である。しかしながら、RCCの組織学的な定義は曖昧である。

申請者らは、64例のMLS症例を対象として、核異型度を評価するために確立された2種類のグレード（腎細胞癌におけるWHO/ISUPグレードおよびFuhrmanグレード）を一部修正し、ソフトウェアを用いて核形態と細胞密度を詳細に評価した。さらに、腫瘍細胞のDNA変異解析、網羅的mRNA発現解析および免疫組織化学染色を施行した。

その結果、modified Fuhrmanグレードによる核異型度の高い群が、無病生存期間が有意に短いことが明らかになった（ $p=0.047$ ）。一方で、細胞密度はmodified Fuhrmanグレードの高い群で有意に大きかったが（高細胞密度領域の割合 $p=0.010$ 、細胞密度の最大値 $p=0.003$ ）、細胞密度は生存解析における予後不良因子とはならなかった。さらに、modified Fuhrmanグレードが高い群では、細胞周期関連遺伝子（*FOXM1*、*PLK1*、*CDK1*など）が有意に高発現していた。

今回の解析結果は、細胞密度よりも核形態異常による評価が、MLSの予後予測において意義がある可能性を示唆している。

以上の成績はこの領域の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。